
またいつか一緒に【第五話】

創離

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

またいつか一緒に【第五話】

【Nコード】

N8318T

【作者名】

創離

【あらすじ】

修学旅行の帰り、僕は事故に遭い右腕と両足を失った。そうしてそんな僕を見捨てるように去っていく友人。僕は恨み呪いながら時間を過ごした。そんなある日、インターネットの掲示板で見つけた『復讐の代行、請け負います。詳細はメールにて』の書き込み。激情の赴くまま、彼は依頼のメールを送信する。二か月後、自分のやったことの結果を実際に目の当たりにした彼は、戸惑いを隠せなくなっゆく。

(前書き)

今回は、設定事項を用意しました。以下の内容に添って、執筆お願いいたします。

リレー小説(第二弾) 設定・注意事項

全40話

一話2000文字以上

登場人物数制限なし

ファンタジー要素無し

SF要素無し

地の文は主人公視点

重複執筆可

ジャンルはその他

執筆予約制廃止(予約を入れてくださる著者様を拒みはしません。執筆予約を入られた著者様に関しては、活動報告に揭示させていただきます)

執筆著者様は、執筆前にご連絡ください

執筆投稿後、必ず御一報ください

あらすじは、前話までの要約を明記

全ての物語を聖魔光闇がお気に入り登録します

後書きに執筆著者様募集広告を添付

一話：聖魔光闇先生 <http://ncode.syosetu.com/n1590t/>

- 二話：日下部良介先生 <http://ncode.syoset.com/n2296t/>
- 三話：ふえにもーる先生 <http://ncode.syoset.com/n3991t/>
- 四話：koyak先生 <http://ncode.syoset.com/n4630t/>
- 五話：創離

ぜひぜひよろしく願います。

パソコンを見ると、新着メールが1件になっていた。

『感想を受信いたしました。』

今後の復讐にも御期待下さい。』

本当にこれでよかったのだろうか？

今ならまだ止める事が出来たんじゃないか。

復讐の経過を見て、恐ろしくなった俺はそんな事を考えていた。

「いや、これで良かった筈だ。決めた筈だ、もう迷わないと」

口に出して覚悟を新たにする。

「これで良かった。これで良かったんだ。だって、これは俺が決めた事だから」

そうだ、いくら業者が何かしようとも、あいつ等を苦しめるのは俺の意思。

俺の意思こそがあいつ等にとっての毒なんだ。

なら、迷ってはいけない。

例え正しくなくても、これは俺が決めた事なんだから。

でも……。

「こんにちは」

家にやってきた声の主は遙だった。

「今日はケーキ買ってきたの。今食べる？」

「あ、いや。冷蔵庫に入れといてくれ」

「分かった」

そう言つと遙は冷蔵庫に向かった。

「今日も優バスケやつてたよ。まだまだバスケはぎこちない感じだけど、普通の生活は問題なさそうだった」

「そうか、それは良かった」

「車イスになつて日が浅いのに監督らしき人に目を付けられてたよ。これなら半年くらいでレギュラー入りできるつて」

「……」

それは……ありがたい。

あいつがこうしてめげずにいてくれれば、俺はあいつを恨む事が出来る。

そつだ。あの時に感じた感情モウと同じだ。

失望と絶望と嫉妬と、おおよそ呪いと呼べるような感情の塊。

この心地の悪い、ドブ水のような感情。

ああ、やっぱり俺はあいつ等に復讐したい！

「どうしたの？ 智哉君」

ひょっとしてニヤけてしまったか？

「いや、何でもないよ」

そう言つと彼女は少しほほ笑んで

「私に隠し事なんてできないよ。智哉君の事なら何でも分かるんだから」

「えっ？」

「うふふふ」

そう言つて席を立ち

「三日月君に会いに行つてみようか」

「三日月に？」

「そう、最近引きこもつてばかり見たいだし、外に出てみよう。

車イスは私が押してみるから」

「でも、あいつがどこに居るかなんて」

「実はもう呼んであるの。三日月君の発案でね、智哉君を家から連れ出そうつて」

「え？」

「でも、ただ会うだけじゃつまらないでしょ？ だから、三日月君の彼女も呼んで4人でダブルデートしよう」

……何を考えてるんだ、能面は。

「いや」

「『いや』じゃなくて、折角女の子から誘ってるんだから男は黙ってついてくる！」

こうして俺は外に連れ出された。

呼びだされたのは、ファミレスだった。

「お前ら2人は会うの初めてだろう？ 俺の彼女の八草やくさ 椎名しいなだ」

「椎名です。みつ君とは最近付き合い始めたばかりです。よろしくー！」

「私は若宮 遥。こっちこそよろしくね、八草さん」

「嫌だなあ、みつ君の友達なら私の友達でもあるんだから椎名って呼んで、遥」

物怖じしない性格みたいだなあ。

「そう？ じゃ、そう呼ぶね、椎名」

この雰囲気壊す勇氣もないし、俺も精いっぱい明るくふるまわないと。

「俺は霧島 智哉。よろしくな……椎名さん」

「うん、よろしく！ 智哉！」

あれ？ てつきりこの見た目だから引くかと思ったのに。

「一通り自己紹介は終わったな」

「え？ 三日月君の自己紹介が終わってないよ？」

意地悪そうにほほ笑む遥がそこには居た。

「あ、そうだねえ。みつ君にも自己紹介してもらわないとお」

こつちも便乗するなら、流れるに俺もだよなあ。

「能面。ホラ、自己紹介だ」

「……まあいいか。只野 三日月だ。少し変わった名前だけどよろしく」

「それだけえ？」

「そうだ三日月君。私たちが質問するから答えて答えて」

「……いや、ターゲットが俺じゃなくて良かった。こつというのは見境ないからなあ。」

「あ、遥それいいねえ」

「質問？」

「それじゃ、私からね。みつ君の好きな食べ物はなんですか？」

「八つ橋」

「……渋い。」

「ぷぷぷ。三日月君、あれ好きなの？」

「ああ、うまい」

「じゃ、私からの質問ね。三日月君はこの後どこに行きたい？」

「そうだな、無難に映画館でも、と思ってる」

「好きなジャンルは？」

「ホラーだ」

「あー。みつ君、私怖いのだメえ」

「じゃ、今日は止めとくか」

俺は何気なく会計の紙に手を伸ばした。別に入れなくて飽きた訳じゃない。

「はい、次は智哉君だよ」

「え？ 俺？」

俺はいきなり振られて用紙を机の上に落してしまった。

「うん、智哉よろしく！」

「えーと、じゃあ」

こいつに質問なんかねえよ。

「椎名さんの事がどの位好きですか？」

「きゃー、智哉君大胆！」

いや、遙しか盛り上がりすぎてないから。

「そうだな」

椎名の方は真剣な顔で能面の方を見ていた。

「彼女を守るためなら代わりに死んでもいいと思ってる」

場に沈黙が流れた。

「本当？」

「ああ、本当だ」

そうして椎名は能面に軽く抱きついた。泣いてはいない。

「嬉しい！」

頭をなでてやる能面。

「見せつけてくれるねえ。でも、デートは始まったばかりだよ」

「あ」

頬が薄く染まる椎名。

「それじゃ、少し目立っちゃったし移動しようか」

そうして俺たちは、ホラー以外の映画を見にファミレスを離れた。

会計はもちろん能面と割り勘した。

あの後、映画見たり、買い物行ったり、ゲーセン行ったりおおよそデートらしい事をしつくすと8時を回っていた。

「あー、あの鞆やっぱり欲しかったなあ」

「悪いな椎名。俺がもう少し金を持ってれば買ってやったんだが」

「いいよ。プレゼントは誕生日にとつとく」

「智哉君、私もあのワンピース欲しかったなあ」

「誕生日にとつとけ」

「買ってくれるの?!」

「遙次第だな」

「可愛げがないなあ。ここは買ってあげるって言って欲しかったのに」

「……」

オカシイ。これで俺はいいのか？ 復讐の対象と楽しく遊んで一日を過ごした。俺はこいつに復讐したいんじゃないのか？ 昨日の夜、決意を新たにしたらかりなのに……。

「智哉君？」

「あ、いや。分かった、期待しとけ」

そう言っただけだと満足したのか、ほほ笑みながら携帯を出していきり始める遙。

「それじゃ、私たちはこれで」

「ああ、それじゃ」

挨拶を交わすと慌てて遙が

「それじゃまたね、三日月君」

「またな」

椎名にも挨拶してやれよ。

「それじゃな、智哉」

「……ああ」

少し遅れて

「じゃね、椎名」

そう言っただけで、俺たちは能面たちとは逆の方向に歩き出す。

「智哉君、今日は私、車イス上手に押せた？」

「……ああ、快適だった」

「？ さっきから返答が少し遅くない？ 押すの下手だった？」

「そんなこと無い」

ただ、今日の事を反省してただけさ。

「それよりはる！」

俺の言葉は後ろから響く、大音量の衝突音によりかき消された。

「……」

俺たちは一緒に後ろを向いた。

すると、そこまではなれない場所で車が壁に突き刺さっていた。そしてその傍では、能面が座り込んでいる。

「能面！」

あのままじゃ、爆発とかするんじゃない。

すると、後ろから遥が走り出した。

俺も車いすで移動するが、速さは比べるまでもない。

「こっち！」

遥が能面を引っ張って車から離す。

「椎名……が」

そのつぶやきが聞こえる距離までは近づいた。

「椎名！」

ある程度まで離れると生き返ったように暴れ出す能面。

「椎名！ 椎名！ クソ！ 守るって言ったのに！ ちくしょう！

ちくしょう……」

……これも、業者の？

(後書き)

前回のまでの先生方が落として落とす感じだったので、テーマは『上げて落とす』にしました。

ただ、前回までに比べて作風が違っわ、まとまらないわで自分の力不足が露呈することに……

これ、3本くらい書いた中から選びました。

3000文字も使って駄文をつらつらと……俺って奴は

これはリレー小説です。

リレー小説とは、複数の筆者による合同執筆(合作)を言います。御参加頂ける方は 聖魔光闇先生 までご一報、そして投稿後にご一報ください。

<http://mypage.syosetu.com/107085/> こちらまで!!

あとがきでウダウダ失礼しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8318t/>

またいつか一緒に【第五話】

2011年6月5日01時55分発行